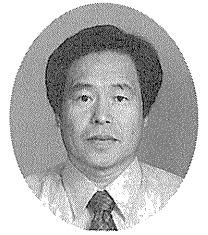


— ずいそう —

大滝ダムの完成を目前にして

岡 孝



今、まさに四十余年の時を経て、大滝ダムが試験湛水を迎えようとしています。奈良県吉野郡川上村に位置するこのダム事業は、昭和34年9月、紀ノ川流域を襲った伊勢湾台風による未曾有の大被害を契機に始まりました。総事業費3,210億円を予算計上した巨大ダム事業です。

しかし当時川上村民の間には、ダム建設反対の感情が強く、事業の進行が非常に難航しました。その頃血気盛んであった当人も、今では笑ってその頃の話をしてくれます。国、県、村、そして地元民と本当に多くの人々の苦難によって、このプロジェクトが40年の時を経て、まさに完結の時を迎えようとしています。

すこし私とダム建設との携わりを顧みますと、ダム工事に興味を抱いたのは、高校時代に土木の教師から、久保田豊さんの話を聞いたときです。彼は、戦前戦後に渡り、アジア・中南米等でスケールの大きい土木開発事業を展開した国づくりの助言者です。当時朝鮮半島に世界最大級の水豊ダムを建設した話でした。また後になり、彼が残した記事「パナマ運河に携わった青山士さんの『自然と戦って民生に幸福をもたらす。これが私の喜びだ。すなわち技師は天職であり月給をもらうために働くのではない』という人生哲学に私は共感を覚えた」を読んだ時、私は彼の技師魂を感じました。

私には、そこまでの信念はありませんでしたが、昭和40年ダム・トンネル建設に関しては最高の技術水準にあった熊谷組に入社し、すぐ岐阜県の乗鞍岳と御岳山の中間に当たる高根ダムの建設に携わることになり、ダム建設の第一歩を踏み出しました。その後、新豊根、岩屋、奥野、片桐、上大須、そして大滝ダムと38年間に渡り7つのダム建設に携わってまいりました。

各ダムごとに想いを馳せることが多々ありますが、最も思い出深いもののひとつに、基礎地盤検査のための仕上げ掘削・岩盤清掃があります。私はこの時が好きでした。それはプロジェクトが本当に一つになる時だからです。現場所長はもとより、元請・専門業者が共に、地位、職種に関係なく、昼夜を問わず、全員スプーンやスポンジを使ってヘドロや石ころの掃除をしました。岩屋ダムの時にはその人数が500人以上にもなりました。検査の日の朝まで、何日も徹夜状態で頑

張ったことが思い出されます。今でも、ヘトヘトになりダムの岩盤に座り込み塩むすびを食べた時の味が忘れられません。片桐ダム以降、大型の吸引機械が使われるようになり、人力に頼る部分がずいぶん減ってきましたが、当時は本当に人の力の偉大さを感じました。

そして私の心が一番痛むのは、災害で亡くなられた方々のことです。いくつかのダム現場では、死亡災害も経験しました。岩盤の崩落により一度に数名が、また、車が谷底に転落、トンネルで機械に挟まれ死亡するなど、多くの尊い命が失われました。しかし、日々急速に人命尊重の意識は高くなり、この意識が施工機械や施工技術の開発を進めてきた一助になっていると思っています。今では、ダム現場における死亡災害は本当に少なくなりました。これはダム建設に従事する者の本当の喜びです。

大滝ダムでもこのような発想のもと、安全性の向上、苦渋作業の減少、作業の省力化・効率化を目差しいろいろな建設機械を開発してきました。同時にケーブルクレーンや骨材プラントのように昭和30年～40年代に製造され、別のダム現場から転用されてきた機械も使用してきました。特に後者の機械はこの大滝ダムの現場が最後の奉公になると思います。そのような設備の解体を眺め、ああ、私のダム建設人生と似たような年数で終わりを迎えるのだと思うと、感無量になります。

さて公共事業、特にダム不要論など十把一絡げで非難される昨今ですが、大滝ダムの完成は、流域住民100万人の生命と財産を守る大きな公益を生み出します。先日、新たな河川整備を目指した委員会による流域住民との意見交換会でも、大滝ダムによる水不足の解消を心待ちにされている住民もおられました。私は最後にこのようなダム建設に携われたことを感謝しています。

最後になりましたが、当現場は、これまで延べ労働時間で400万時間無災害、さらに着工以来(約900万時間)重大災害0を継続中です。竣工まで残すところ数ヶ月となりました。最後まで危険0を目指し、これまで以上に意識して工事を進めていく所存ですので、今後とも皆様のご指導の程よろしく願いいたします。